

第五回地域研究コンソーシアム賞 受賞者発表

地域研究コンソーシアム事務局

地域研究コンソーシアム（J.C.A.S.）は、その規約において「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とする。これにより、人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図る」と述べ、それに続いて（一）共同研究の企画・実施・支援、（二）海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、（三）研究成果の国内外への発信・出版、（四）地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げています。

地域研究コンソーシアム賞は、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあつた研究業績、共同研究企画、そして社会連携活動を広く顕彰することを目的として授与されます。研究業績を対象とする「研究作品賞」、若手研究者の研究業績を対象とする「登竜賞」、シンポジウムなどの研究企画を対象とする「研究企画賞」、社会連携活動を対象とする「社会連携賞」の四つの部門によって選考を行い、毎年秋に行われている年次集会で受賞者を発表・顕彰しています。

地域研究コンソーシアムの詳細についてはウェブサイト <http://www.jcas.jp/> を、地域研究コンソーシアム賞については <http://www.jcas.jp/about/awards.html> を参照ください。

第五回(二〇一五年度) 地域研究コンソーシアム賞 審査結果および講評

第五回(二〇一五年度) 地域研究コンソーシアム賞の授賞対象作品ならびに授賞対象活動について同賞審査委員会の審議結果を発表する。

今回の募集に対して、研究作品賞応募作品一三件、登竜賞応募作品一六件、社会連携賞応募活動一件の推薦があった。本審査委員会では、第一次審査によって選ばれた研究作品賞審査対象作品二件、登竜賞審査対象作品五件、社会連携賞審査対象活動一件を審査した。各委員の活発な議論と慎重な審議の結果、それぞれの部門について以下の作品あるいは活動を授賞対象として選出した。

受賞された三氏、一団体には、委員会を代表して心からの祝意をお伝えしたい。以下は、各賞の授賞理由ならびに授賞作品・活動に対する講評である。

第五回地域研究コンソーシアム賞審査対象作品は、どれも非常に興味深く優れた作品ばかりであった。また、その研究対象も研究対象地域も研究アプローチも多岐にわたっており、審査は難しい作業となった。同賞にはとくに審査基準は定められていないが、「国家や地域を横断する学際的な地域研究」であることが求められていると言える。ただし、「地域横断性」にしても研究分野横断性にしても、研究対象地域を複数にしたり、さまざまな研究分野をただ並列したりするだけでよいものではない。特定空間のユニークな地域研究によって他の地域・空間での研究に豊かな示唆を与えることも地域研究の重要な要素でもあろう。そのためには特定地域・空間の研究であるが、研究対象地域を越えたユニークな研究となっており、地域横断的に共有できる理論や方法論に基づいた問題意識や論理構成をもつことが求められる。そうした観点から、本審査委員会は研究作品賞および登竜賞の審査において、第一に、地域研究の醍醐味であるフィールドワークの魅力を遺憾なく発揮している作品であること、第二に、地域研究として理論的にも方法的にも学術書として完成度が高いものであること、を重視した。ただし、こうした審査基準は今後の同賞のあり方を制約するものではないことを付言しておきたい。

研究作品賞および登竜賞を授賞した作品は、明確な問題

● 研究作品賞授賞作品

横山智著

『納豆の起源』(NHK出版)

● 登竜賞授賞作品

箕曲在弘著

『フェアトレードの人類学——ラオス南部ポーラヴェー

ン高原におけるコーヒー栽培農村の生活と協同組合』

(めこん)

小西賢吾著

『四川チベットの宗教と地域社会——宗教復興後

を生きぬくボン教徒の人類学的研究』(風響社)

● 研究企画賞授賞活動

該当なし

● 社会連携賞授賞活動

境界地域研究ネットワークJAPAN(JIBSN)

「境界地域を結ぶ『公・学・民』の研究・実務連

携と社会貢献」

二〇一五年一月一日

地域研究コンソーシアム賞審査委員会

委員長・堀江典生

委員・遅野井茂雄、山田孝子、門司和彦、中村尚司

設定とともに、多大な努力・労苦を伴う類い希なフィールドワークから生まれた新たな知見を提示しつつ、広範な文献調査に加え、しっかりとした理論的・方法的裏付けをもつ緻密な論理構成をもった学術書として、高い完成度を示している。これら授賞作品は、我が国の地域研究のレベルの高さを誇る作品群であったとことができよう。登竜賞を一件に絞らず、二件の授賞となったのも、そうした我が国の若手地域研究者の甲乙つけがたい作品の完成度の高さによるものである。なお、登竜賞については、日本や他地域における類似の事例をより積極的に研究に取り込むことにより、地域横断的・一般的な問題としてそれぞれの地域の研究を展開すべきとの指摘があったことも付言しておきたい。

社会連携賞の選考にあたっては、地域研究の特色を活かした活動であり、その活動が社会の多様な参加者を引き寄せ、今後の我が国の地域研究の進展に寄与するような持続性をもつ活動であるかどうか、審議の主要論点となった。地域研究の新たな社会的実践の可能性を示した活動として、今後も持続的にその活動に取り組み、我が国の地域研究の新たな展開に貢献して頂きたいとの審査委員の強い思いが含まれている。

横山智著

『納豆の起源』（NHK出版）

本書は、ラオス、タイ、ミャンマー、インド、ネパールなど、東南アジア大陸部からヒマラヤにいたる照葉樹林帯においてさまざまな民族がつくる納豆の製法と利用方法を基にして納豆の起源を探った作品である。まず納豆の原料となる大豆の栽培起源に関する議論、そして日本を中心とした発酵大豆食品の先行研究を幅広くレビューするところから始まり、各地の納豆をつくる際に必要となる菌の供給源となる植物利用、加工の形状、利用方法が詳細に記述される。そして、納豆生産と利用の共通点と差異から納豆の発展段階論を提示し、さらに納豆加工形状の空間的分布を発展段階論と空間的に重ね合わせることで納豆の起源仮説を導き出す。フィールドワークによって得られたデータを基に論じられた本書は、納豆の地域的多様性を明らかにして魅力的である。納豆の菌を研究する微生物学分野からの納豆起源研究には限界があることも明確に述べられている。

本書の問いはきわめて単純でわかりやすい。それは、どこにどのような納豆が存在し、その発祥はどこかを探るものである。横山氏は一五年間にわたる地域横断的なフィールド

ワークによって、これまで納豆の報告がなかった東南

アジア大陸部とヒマラヤの未調査地域を含む六三地点を踏破し、独自の論を立て、その問いに答えた。フィールドワークから生まれた新たな知見の提示と特定の専門分野の視点を超えて論じられた方法論が非常に高く評価された。納豆は照葉樹林文化の文化要素の一つとされているが、横山氏は照葉樹林文化論における納豆の位置づけをも修正しており、四〇年以上の月日が経過している照葉樹林文化論の再考を促す上で大きな学術的貢献を果たしていることが特筆される。

本書は、学術書としてばかりではなく、一般読者にも分かりやすく、親しみやすく書かれており、幅広い読者を満足させることができる情報を提供している点で秀逸の作である作品と判断された。ただし、多様な納豆文化をすべて「伝播論」で解釈しようとしている点については、もう少し異なる観点から納豆文化論を展開できたのではないかという意見が審査委員の間で意見されたことも付言しておきたい。民族接触などにより食文化が伝播することは十分に起こりうることであるが、発酵した大豆の利用そのものは、各地域の食文化、気候などの特性により独自の発達を遂げ、多様な納豆文化圏が生まれたということも考えられる。納豆食文化圏という類型から東南アジア地域の食文化を再構成するという今後の展開も期待したい。

登壇賞

箕曲在弘著

『フェアトレードの人類学——ラオス南部ボーラヴェン

高原におけるコーヒー栽培農村の生活と協同組合』

(めこん)

小西賢吾著

『四川チベットの宗教と地域社会——宗教復興後を生きぬくボン教徒の人類学的研究』（風響社）

箕曲氏の作品は、南北問題の重要なテーマであるフェアトレードを対象とする。著者の箕曲氏はラオス南部のボーラヴェン高原におけるフィールドワークに基づき、理論と実証の両面から考察している。世界貿易の一角を占めるまで、拡がりつつあるフェアトレードは、市場経済との距離の取り方から大きく、認証型と連帯型に分類される。小農生産者にとって、双方が持つ利害得失を厳密かつ丁寧な検討し、その問題点を明らかにしている。カール・ポランニー以降の経済人類学の成果を咀嚼し、経済関係を社会に埋め込む論理を展開している。その方法論の吟味も、生産から流通・消費にいたるデータの活用も、きわめて周到になされている。

五〇〇ページ近くの大著であり、多種多様のデータ分析

を行っているため、一見して取りつきにくい学術書のような印象を与えるが、謎解きのようなフィールドワークの面白さに引き込まれる。抑制のきいた文体で記述されているが、箕曲氏は窮屈な学術研究の壁を乗り越えようと試みている。結論として、アジア農村社会を内在的に調査する人類学が、生産者の課題を消費者に伝える代理人になる道筋を示している。関連する分野に過不足なく、目配りをした完成度の高い学術研究である。しかし、学術研究にとどまらない社会貢献の作品でもある。

国際貿易において貧しい生産者と豊かな消費者が取引をする場合、フェアトレードは公正な取引を行い、生産者の経済生活を向上させる、というのが北側諸国の通説である。著者はフィールドワークの成果を携えて、この通説に挑戦する。ボーラヴェン高原におけるコーヒー生産者組合では、フェアトレード運動を通じて経済的な利得は得られなくとも、人びとが対等な社会関係を形成させようとしたことがわかる。本書で扱われているコーヒー豆は、フェアトレードが得意とする商品である。フェアトレード自体がグローバルな現象であり、この作品は他地域への示唆に富む研究でもある。従来ラテン・アメリカやアフリカの産地における研究が主流であるが、ラオスの事例を踏み台に東チモールなどのアジアのコーヒーとの比較研究を進めて欲しい。また、北側諸国の経済論理に挑戦するアジアの論

理を求めるならば、フェアトレードとは異なるアジアの運動、たとえば、同じアジアの国である日本の生活協同組合運動といった消費者運動など、我が国の身近な事例なども省みた研究も必要であるとの指摘もあった。

フェアトレード運動は、消費者と生産者の間の障壁を乗り越える可能性を開く、と著者は信じる。この人類学的な挑戦に期待し、『フェアトレードの人類学』は登竜賞にふさわしい、と評価する。

小西氏の著書は、社会主義国家中国のもとで生きるチベット人社会に関する実証的な研究は、端緒を開かれたばかりといえるなかで、長期間のフィールドワークにもとづき、改革開放後の四川省のチベット社会における宗教実践の復興と存続の諸相を僧職者側と世俗側の双方から解き明かした初めての民族誌といえるものである。とくに、宗教実践の活性化の諸相について、ボン教僧院と村の人々の宗教実践に深く寄り添い、いかなる要素が人々を宗教に巻き込みつなぎ止めるのかという点からアプローチしていったことは非常に独創的なものである。

本書の最大の特徴は、改革開放後の宗教の活性化と維持の問題を、ボン教僧院の経済的基盤という点ばかりではなく、僧院を中心あるいは村の行事としての宗教実践が世俗の人々を巻き込んでいく、心と身体の問題として活写した点にある。そこでは、「加行」という宗教実践にみる「反

復を生み出す達成感と一体感」「身体に刻まれる修行」

チョルテン建設にみる「蕩尽ともいえる膨大な物品の投入」というように、身体化や可視化といった人々の心や身体への直接的な訴えが人々を宗教実践に巻き込んでいく決定的な要素となり、人々の共同性が紡ぎ出されることが明らかにされる。

本書が、ボン教という宗教の活性化と維持装置に限定された議論で終わっている点には、物足りなさも指摘された。地域の実情を鑑みて難しさがあるとはいえ、地域にとつて重要な文脈であるはずのボン教と中国政府や四川チベット社会との関係を捉える説明や分析が不十分であるとの指摘もあったが、地域研究としての方法論の完成度や学術的成果という点では評価が一致した。地域に深く入り込んだフィールドワークにもとづき実証的に明らかにされた、宗教の維持装置となる「身体性」「熱狂的な人々の巻き込み」という問題は、日本の伝統社会における「祭り」の問題など、地域社会の維持装置の解明というより一般的な問題へと広く展開しうる可能性を秘める成果として、高く評価された。

JAPAN (JIBSN) の今後の持続的展開、新たな挑戦への期待が授賞理由に込められていることも付言しておきたい。

社会連携賞

境界地域研究ネットワークJAPAN (JIBSN) 「境界地域を結ぶ『公・学・民』の研究・実務連携と社会貢献」 <http://src.hokudai.ac.jp/jibsn/>

境界地域研究ネットワークJAPAN (JIBSN) が実施する「境界地域を結ぶ『公・学・民』の研究・実務連携と社会貢献」は、第一に、我が国のポーターズタディーズ(境界研究)を通じて教育・研究機関のみならず、自治体、公益法人、NPOなど多様な境界域のステークホルダーを包摂する活動であること、第二に、地域研究の醍醐味であるフィールドワークや国際会議およびセミナーなどによる研究や「学び」とポーターリズムなど地方活性化につながる社会実践とをみごとに結びつけていること、第三に、地域を越えた共通課題を共有しつつ、国際的にも開かれた活動によって我が国の地域研究の地域横断的、国際的展開を行っていること、などにおいて、高く評価できる。これらの点に鑑みて、同活動は、社会連携賞の授賞対象としてふさわしいものと判断される。

境界地域研究ネットワークJAPAN (JIBSN) の活動を授賞対象とすることは審査委員が総じて同意するところではあったが、それは過去の実績への評価とともに、ポーターズタディーズを通じた境界地域研究ネットワーク

受賞者紹介

研究作品賞



横山 智
(よこやま・さとし)

名古屋大学大学院環境学研究科教授。博士(理学)。筑波大学大学院地球科学研究科地理学・水文学専攻中退。熊本大学文学部助教授(准教授)を経て現職。専門分野は地理学。とくにラオス農山村部における森林利用や生業などの調査から、自然と人間活動の関係を捉える研究に取り組む。大豆発酵食品の研究もライフワークとして実施。著作として『Integrated Studies of Social and Natural Environments of *Transition in Laos*』(共編著、Springer, 2014)、『資源と生業の地理学』(編著、海青社、二〇一三年)、『モンスーンアジアのフードと風土』(共編著、明石書店、二〇一二年)、『ラオス農山村地域研究』(共編著、めこん、二〇〇八年)がある。

登竜賞



箕曲在弘
(みのお・ありひろ)

東洋大学社会学部社会文化システム学科専任講師。博士(文学)。専門は文化人類学、東南アジア地域研究。早稲田大学第一文学部卒業後、同大学院文学研究科博士課程修了。ラオス情報文化省調査員、明治学院大学社会学部付属研究所研究調査員、東洋大学社会学部助教を経て、二〇一五年より現職。ラオス南部のコーヒー栽培農村において、フェアトレードの生産者に対する影響について、協同組合、仲買人、村落政治機構に注目してフィールドワークを行っている。

登竜賞



小西賢吾
(こにし・けんこ)

金沢星稜大学教養教育部専任講師。博士(人間・環境学)。専門は文化人類学。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程研究指導認定退学。日本学術振興会特別研究員PD、大谷大学・関西学院大学・神戸女学院大学非常勤講師、京都大学ころの未来研究センター研究員等を経て二〇一五年より現職。チベット社会(とくに中国四川省)と日本をフィールドに、集団的な宗教実践と地域社会の共同性がいかに連関するのかを研究している。チベットのボン教徒に関する民族誌的研究のほか、石川県能登地域の活性化に向けた研究にも従事。

社会連携賞



長谷川俊輔
(はせがわ・しゅんすけ)
(境界地域研究ネットワークJAPAN(JIBSN))

北海道根室市長/境界地域研究ネットワークJAPAN(JIBSN)代表幹事。一九四五年北海道根室市出身。根室市職員を経て、一九九八年根室市収入役、二〇〇二年根室市助役をそれぞれ歴任し、二〇〇六年より根室市長就任(現在、三期目)。北海道大学の岩下明裕教授の呼びかけによって二〇〇七年に旗揚げされた「国境フォーラム」に当初から参加し、二〇一五年四月よりJIBSNの第三代表幹事に就任、現在にいたる。